

曹洞俳壇

選・村松五灰子

たましひのあの世この世と春眠し

大阪府 柏原 才子

評 「春眠暁を覚えず」で、まことにもつて春は眠い。

「たましひ」の覚めやらす、彼方へこちらへと、たゆたえる様の表現が楽しい。もう少しだけ眠らせてあげようではないか。

米二合研いで八十八夜かな

千葉県 鈴木 英子

評 立春からかぞえて八十八日のこと。いよいよ夏が始まる。「米を研ぐ」と「八十八夜」の組み合わせが、夏に向かう気概と明るさを盛り上げている。

◆ぼうたんの咲きて忘るる私利私欲

埼玉県 小林 茂之

◆獣と勝負を賭けて芋植える

福島県 西木 甚

◆入浴車今日も来てをり藤ノ下

神奈川県 小橋 幸

◆一握りてふも初もの土筆摘む

大分県 武石富美子

◆終電車代田へ明かりこぼしゆく

島根県 藤江 堯

◆読経や時に参加の臺

神奈川県 佐野 勇

◆卒寿なる馬齢のなほも更衣

北海道 大野 節子

◆春愁や寝付き悪くて早起きで

青森県 市川 清美

◆たんぼの風に押される散歩かな

神奈川県 瀬戸 栄子

◆入道雲じつと構えし鬼瓦

静岡県 島田 イネ

*選者吟

張りつめし空を叩きて揚げ花火

五灰子

*作句小見

「心を遊ばせる」という言葉が好きです。

天地の山川草木の下に暮らす人間や小鳥たち、また、あまたの芸術どれも楽しい。難しいのですがそれらを濾過して私は俳句に。材料は無限です。毎日を楽しく過ごしております。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

農業は為さずさせじと嫁ぎし娘田植を馴れ
しと声のあかるし
秋田県 小田嶋恭葉

評 農家に嫁ぐときの条件が、農作業はしないということだ
った筈なのに、現実にはそんなに割り切れるものではなかつ
たことが、親の立場から詠われている。「声のあかるし」で、
健気な娘の暮らしぶりに安堵している作者がうかがえる。

菜の花の日を照り返す明るさに羽ばたく蝶
の影一つなし
福井県 山本 静

評 菜の花の黄の色が日を照り返すことで、更に明るくなる
様子を、見えない「蝶の影」を出すことで表現してユニーク
な視点である。結句から蝶はいくつかいるようだ。

降りしきるさみだれに又も嵩上げの土は裂かれて雨水を
流せり
岩手県 阿部 颯子

◆交代の息子の顔にほつとするあはれ息子もかく思へるや
山口県 濱田 道子

◆ふだん着のフットが光るあの日より明日に一歩の今ある
われら
宮城県 小田嶋麻利

◆わたくしはここに居ますと言う如く君の遺したつつじ咲
き増す
福島県 佐藤 忠

◆老杉の大木乗っ取り山藤は天^{てん}辺占めて花房揺らす
奈良県 横井 正子

◆妣^{はは}偲び宴張る姉も妣の歳一つを越えて妣居ることく
新潟県 星野 三興

◆月の夜友に引かれて階段を登りてやつと法堂に入る
山梨県 北村 富子

◆子らが脱ぐ靴は整列させられて魚のように玄関占める
東京都 野村 信廣

◆廃村に街灯一つ灯りたり人の温もりわずかにとどめ
埼玉県 新井巴喜雄

◆屋根叩く音は何かと仰ぎみる藤の実はじける音すさまじ
く
秋田県 小松 紀子

*選者詠

水張^{みはり}田は輪郭あわく雲しずめ昨日の我をあ
いまいにする
ちづ

*作歌小見

介護する人の本音を正直に詠う濱田さんの一首、神経を張
りつめてお世話すればこそその安堵感。「あはれ」に介護する人
される人双方の万感の思いがこめられるようです。阿部さん
の歌、中々進まない震災復興への焦慮がうかがえます。



大本山永平寺



灯ともしび

霊峰白山の麓すそを流れる九頭竜川くずりゅうがわでは、想いや願いを灯籠とうろうにのせて流す、「永平寺大燈籠流し」えいへいじだいとうろうながが開催されます。

涼やかな夕べの水面に、多くの想いや願いがともります。

私たちが、相手に想いや願いを伝える時には、手紙や電話など、様々な方法があります。しかし、伝えたい相手が、住所のない、自身の心の中にいる時には、どうやって伝えたらよいものでしょうか。

お釈迦さまは、『涅槃経』ねはんぎょうの中で「自らを灯とし、他を灯とすることなかれ。法を灯とし、他を灯とすることなかれ」とお示しです。

例えば僧侶であれば、自らが仏の道を行ずることで、何時でも仏さまと共に生きることが出来るということです。

私たちは、大切な方への供養の思いを「あなたと共に生きています」と、合掌や灯籠にあらわすことができます。

盆月の月夜に、皆さまお一人お一人の、手の舞う処、足を置く処に、皆と共に生きる仏の願いがともり続けますことを灯籠にのせて祈るものでございます。

ご本山だより



大本山總持寺



真夏の作務さむ

旧盆にあたる八月は、多くの修行僧が師寮寺しりょうじ（師匠の寺）の檀務補佐たしよで他出（帰省）いたします。このため、さすがの總持寺ももの寂しい雰囲気に包まれます。

特に、今春上山の修行僧にとって初めての他出であり、たくましく成長した姿をご本師やご寺族、お檀家の方々に見ていただく好い機会となっております。旧盆が終わり、それぞれが地方から修行僧が戻ってくると、總持寺は再び活気に溢れます。

ところで、夏は草がよく伸びます。總持寺では除草剤などは用いず、人海戦術でひたすら草むしりに精を出します。また、落ち葉の掃き清掃や長廊下の雑巾がけなどもあり、広大な境内を清浄に保つために毎日の作務は欠かすことが出来ません。

作務のときは先輩僧も新米僧も一緒に汗だくとなりますが、休憩でいただくお茶と菓子は何とも言えない滋味があります。

また、八月下旬には「祖跡巡拝」が行われ、ご開山瑩山禅師さまや二祖峨山禅師さま縁ゆかりの地を参拝いたします。この参拝修行で、修行僧たちは曹洞宗や總持寺の歴史を自分の眼で学び、ご開山さまや二祖さまたちをより身近に感じることが出来るのです。同時にそのことは、祖師方の教えが脈々と相承そうじょうされていることを実感することに繋がるのです。

大本山總持寺／045-581-6021